



親善交流に参加した中高生

北区の国際交流センターで

大地震 ハイチの子供とサッカー交流

「社会を変えたい」

AMDA 中高生が報告会

今年1月のハイチ大地震で被災したハイチの子供と、8月にサッカーで交流を深めた中高生の報告会が、北区であった。スポーツ親善交流で復興を支援しようと国際医療救援団体「AMDA」(本部・北区)が企画し、ハイチ隣国ドミニカ共和国に日本、ハイチ、ドミニカの3カ国の子供たちを招いた。「ハイチの子供たちの現実を

知った。こんな社会を変えたい」。交流から2カ月、中高生の心境に変化が生まれている。

AMD Aは地震直後から普及波代表らによる緊急救援チームをハイチに派遣。手足を切断せざるを得なかった被災者が多くいたことから、現地で義肢支援に取り組んでいる。親善交流は8月16日〜25日にあり、ドミニカ共和国合同チームによるサッカー大会や、5月からハイチに住み支援にあたるAMD Aの義肢装具士、八尾直毅さん(30)の話聞いた。

今年30日の報告会では参加者を代表して、新庄村立新庄中学校の新家夢紬さん(15)、百恵さん(13)姉妹、広

島根福山市立城北中学校の田坂憲宏君(13)、小山諒祐君(13)が発表した。百恵さんはハイチの子供たちが笑顔で接してきたことに驚き、地震の影響は無いと思った。しかし、ハイチの子供たちが帰国直前に口々に帰りにたくないと言ったこと、八尾さんが語った「子供たちが住む被災キャンプの環境はひどく、雨も防げない」というハイチの現実には驚き、「視野が広がった」と話した。夢紬さんは帰国後、世界の貧困問題などを調べ、「ハイチに『帰りたい』と語った。

小山君は元サッカー日本代表の中田英寿さんのようにサッカーを通じた国際交流が夢だ。交流を通じて「国際社会で何が起きているかが行く前よりわかった」という。田坂君は「支援は『困った時はお互いさま』。言葉が違っても分からないことを分かるように伝えていくのが、コミュニケーションだと思っ

た」と話していた。

【石戸諭】